house in shinkawa　あると同時にないところの境界を目指して

小さな家の大きなテラス

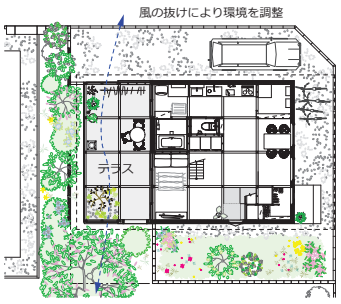
敷地は札幌市内からほど近い比較的古い住宅地にあり、近隣住戸は築四十年程度の経過が見受けられる。各々敷地境界をコンクリートブロック二段程度の低さで区切っているが、樹木はお互いに越境しあっている様なおおらかな地域である。ローコストが要望されていたので屋根の積載荷重軽減や防水価格を鑑みて切妻とし、雪を落とすスペースを残して建物は敷地の中央に配置されている。室内空間のフットプリントは16坪程度。コストを抑えるため既製建材を最大限有効に使い、建物の階高は梁下寸法を既製建具の高さ寸法に合わせることを基準とした。梁上から七寸勾配で屋根は架けられ、一部は屋根裏部屋的な個室としている。また北海道のみならず、世界的にみて北方の建築は雪から建築を守るために断熱、気密の取れた厚い壁で必然的に覆われるのだが、室内空間の半分もある8坪の気積の大きなテラスは、雨風を凌げるよう屋根と半透明の表皮で囲われた空間で断熱性能は担保していない。内部のようであり外部のようでもある。北海道の住宅に見られるサンルームの延長線上に位置づけることもできるかもしれない。

リビングからテラスを見る。４間角の室内南西側に２間幅のテラスが取り付く構成で、１間ピッチで105角の柱を立て、柱間を繋ぐ土台と梁を露出させグリッドを浮かび上がらせる。床、壁共にオスモ塗装の上、ヤスリがけ。1階の天井高は既製建具の寸法に合わせ、かつ建材を最大限有効に使うため2,050mmとしている。

ダイニングからキッチンをみる。

生活を幅を広げる半屋外テラス

居室と大開口で繋がる半屋外テラスは雨風を防げるが非断熱の大空間となっている。夏から中間期、生活はリビングやダイニングから飛び出し、テラスにまで拡張される。一方、冬はテラスがサンルームとなり、厳しい寒さの助けになる。半屋外のテラスは居室と連続することで多様に変化し、居室の機能を拡張する手助けとなる。



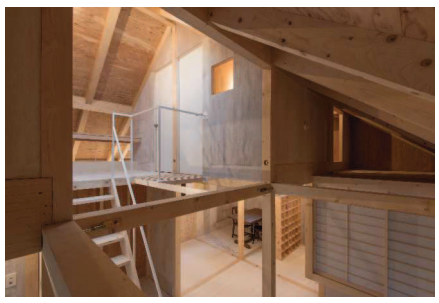
夏から中間期、生活はテラスにまで拡張される。

冬。車は軒下に移動、使わない自転車はテラスに。

開閉可能な扉

小さな個室

積雪を考慮し７寸勾配とした屋根裏には３つの寝室が設置され、ワークスペースで繋がれている。２つの居室にはロフト空間があり、生活に楽しさを加えている。居室の天井高は1,500～2,743mm。床と真壁の壁部分は塗装とし、それ以外は素地としている。塗装は周りの木材とバランスを見ながら現場でやすりがけをしてトーンを調整した。

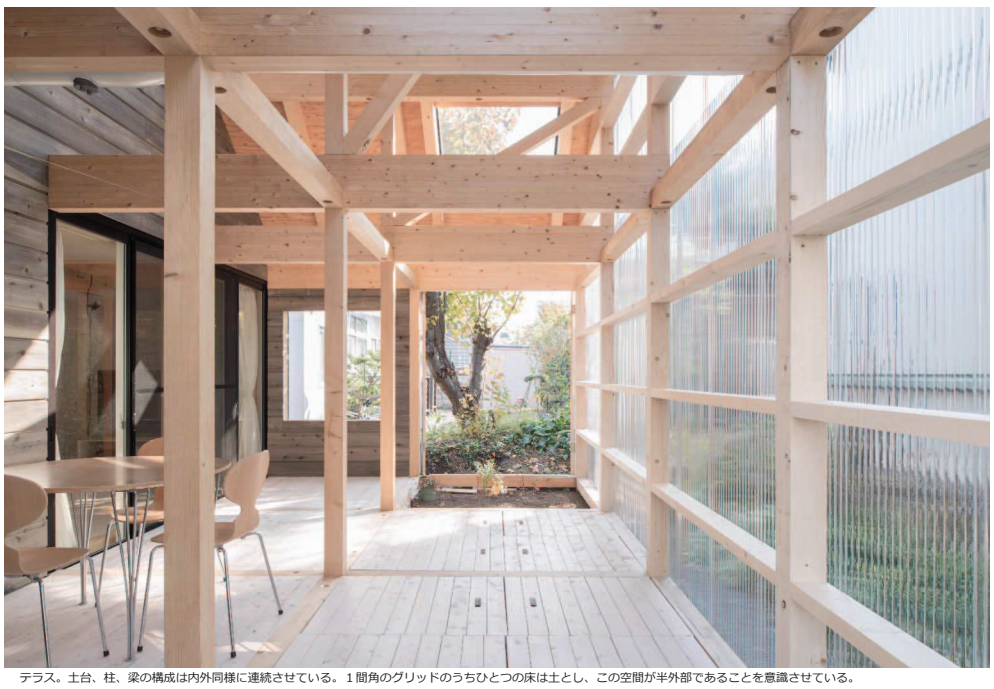


あると同時にないところの境界

テラスと室内は、建築要素の反復により繋がっている。テラスと室内を横断して反復している土台、柱、梁は建物のストラクチャであると同時に、反復するという構成のストラクチャも担っている。また、構造以外の建築要素である天窓や建築金物も同様に反復している。土台に囲まれた床と柱に挟まれた壁は屋内では合板によるが、テラスは夏には開け放ち雨に当たるため、デッキ材や羽目板等の外部的な素材となっている。これら寸法は変わらないが素材を変え、少しの差異を伴って内外を反復している。
「house in shinkawa」は寒冷地に建つという環境上、テラスと室内を分節するガラス、サッシという明確な境界を必要とする。その明確な境界を反復と差異によって〈あると同時にないところの境界〉とすることを目指した。それは実際に（温熱環境的に）小さな家としながらも、環境と接続し広がりをもつ家にすることができた。

リビング・ダイニング。床下にはパネルヒーターが設置されており、暖められた空気が穴を通って建物全体を循環する仕組み

キッチン奥のパントリー。上部はロフト。

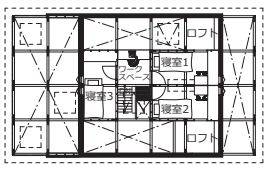


テラス。土台、柱、梁の構成は内外同様に連続させている。１間角のグリッドのうちひとつの床は土とし、この空間が半外部であることを意識させている。

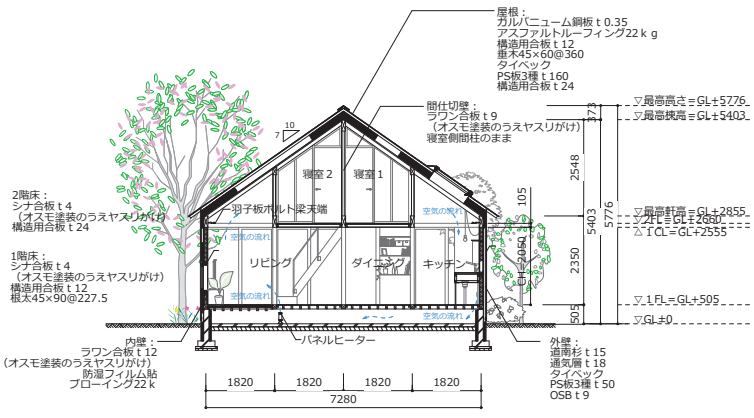
1F plan 1:100

概要

所在地　：札幌市
地域地区：第一種低層住居専用地域
構造　　：木造2階建て
敷地面積：188.84㎡
建築面積：88.73㎡（建蔽率46.9%）
延床面積：104.63㎡（容積率55.4%）



2F plan 1:200



Section 1:100

Site 1:1000